

with コロナ時代と部活・サークル/1 年生問題 ～交流の場はようになる？～

班長:木崎拓真 副班長:久米山幹太 資料:広兼靖也 渉外:米田有希 記録:渡辺莉緒 オンライン調整:北口立大
指導教員:谷口守 TA:清水宏

1. はじめに

1.1. 部活・サークル/1年生の現状

新型コロナウイルスにより、大学での部活動やサークルの多くが対面での活動を禁止され、活動の休止、またはオンラインでの活動を余儀なくされた。例年4月～5月の入学直後に行われる新歓も今年は中止となってしまい、部員の確保に苦しんでいる団体も多くある。また、部活動やサークルに所属できず、交友関係が広がらない1年生の数は例年よりも多いと思われる。

1.2. 筑波大学の状況

茨城県でも緊急事態宣言が発令された4月頃、筑波大学では課外活動の全面禁止、さらには敷地内の立ち入り禁止要請が出された。この影響を受け、各部活・サークルはそれまで行って来た活動や新歓を停止せざるを得なくなった。夏休み明けの10月、ついに部活・サークルを再開する許可が降りたが、これにも多くの条件が課された。その条件について細かく書いてあるのが、10月1日に公開された「筑波大学課外活動における団体活動開始ガイドライン」である。活動開始のルールは主に、団体活動開始届を提出すること、感染防止対策・健康管理・3密回避を心がけて活動すること、感染防止対策として

は手指の消毒、マスクの着用等があり、会食・懇親会も未だ禁止されている。また、健康管理のために健康観察記録や活動履歴を提出することが求められている。3密回避のためには、活動人数を減らす、可能な限りオンラインで活動する等の対策が挙げられている。12月現在ではガイドラインは10月のものと同じだが、11月後半の感染拡大により茨城県が出した外出自粛要請に伴いたい外での活動禁止などの項目が一時的に追加された。しかし、この項目は県の外出自粛要請の解除とともになくなり現在は活動を再開している部活サークルも多くなっている。

1.3. 他大学の状況について

表 1 は近隣の国立大学の対応を示したものである。近隣の国立大学3校と比較してみると、その期間に相違はあるものの、いずれの大学でも感染防止のために部活・サークルによる活動禁止という対応が取られていたことが分かる。また、活動再開が認められるには、東京大学を除く3大学で、設定した基準を満たすことが必要とされている。12月において他の大学では10月時点からの変化は見なかった。

表 1 近隣の国立大学の対応

	課外活動 禁止期間	学内施設の 利用開始	活動再開条件
茨城大学	4/14～7/9	10/19～	10/12～15に開催された「新型コロナウイルス感染症感染防止対策研修会」に参加、対策に取り組むこと [茨城大学, 日付不明]
千葉大学	2/28～8/6	10/1～	感染予防策を踏まえた「活動再開計画書」を大学が審査、基準を満たしていると判断されること [千葉大学, 2020]
東京大学	3/26～8/1	8/6～	特になし
筑波大学	4/9～	10/1～	「団体活動開始届」を提出すること、感染防止対策・健康管理・三密回避に努めること [筑波大学, 2020]

2. 調査方法

2.1. 問題意識

感染防止対策の中でコロナかの今部活・サークルがどう活動していけばよいのか、1年生はどう向き合っていけばよいのかと私たちは考えた。

2.2. 問題解決のために

部活・サークル側と学生側の問題解決を行うために、それぞれの部活サークル活動の実態を把握する必要があると考え、アンケートで「部活・サークルの実態」と「1・2年生の実態」を調査することにした。部活・サークルに対しては、対面活動を行っているのか、活動の変化や活動形態と交流度合いなどについて、また、1・2年生に対しては部活・サークルに入っているか、部活・サークルでの交流度合いと活動満足度などについて聞いた。

2.3. アンケート概要

表 2 部活・サークルに対するアンケート概要

調査名	部活・サークル活動の現状と1年生の動向に関する実態調査
調査対象	筑波大学が管轄している学生団体である 課外活動団体（135団体） 一般学生団体（115団体） 計250団体
調査目的	コロナ禍における部活・サークル活動の実態把握
配布・回収方法	芸術サークル連合会、文化系サークル連合会等からメールで代表者にアンケートを送付
配布実施期間	2020/11/23～2020/12/3
回収部数	43部

表 3 1年生に対するアンケート概要

調査名	筑波大学の1年生への部活・サークルに対する意識調査
調査目的	コロナ禍における部活・サークル活動が1年生にとってどのような立ち位置となっているか明らかにする
配布・回収方法	筑波大学の1年生にSNSを通じてアンケートを送付する
配布実施期間	2020/11/30～2020/12/7
回収部数	99部

表 4 2年生に対するアンケート概要

調査名	筑波大学の2年生への部活・サークルに対する意識調査
調査目的	コロナ禍における部活・サークル活動が1年生にとってどのような立ち位置となっているか明らかにする
配布・回収方法	筑波大学の2年生にSNSを通じてアンケートを送付する
配布実施期間	2020/12/4～2020/12/7
回収部数	65部

3. 分析

3.1. 部活・サークルに関する分析

図1は、アンケートの「各団体が現在どのように対面で活動しているのか」という活動形態を聞いた項目と「1年生とどの程度交流できているか」という項目を掛け合わせたものである。対面活動をしていないと答えた団体数が最も多く、さらにそのほとんどは、1年生との交流ができていない。また対面活動を始めた後も、オンライン活動を続けている団体があることがわかる。対面の活動のみに力を入れている団体は、現在1年生との交流ができていく傾向がある。オンラインでの活動も続けている団体は、結果にバラつきはあるものの、1年生との交流を「とてもできている」と回答した団体の数が、総数の多い対面のみでの団体と等しく、割合としては高いことがわかる。また、図2より、対面での活動とオンラインでの活動では活動満足度に大きな差は見られないことがわかる。

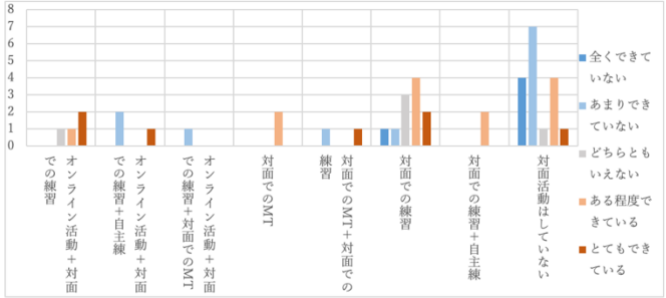


図 1 部活・サークルにおける活動形態ごとの1年生との交流度合い

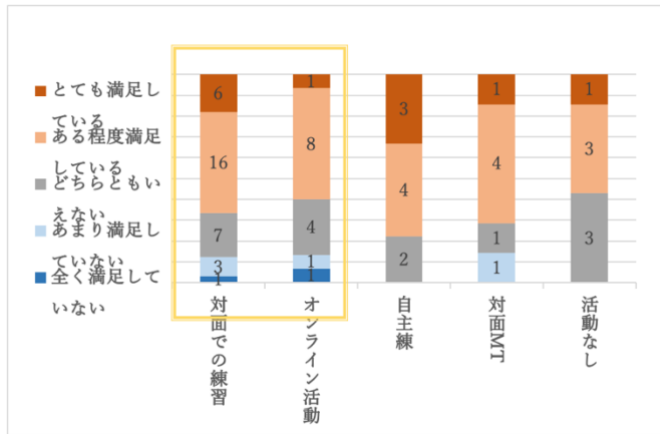


図 2 一年生における活動形態と交流度合い

3.2. 1・2年生に関する分析

表 5 を見ると対角線上に分布しており、先輩との交流度合いが活動満足度に影響していることが予測できる。ここでカイ二乗検定を行ってみると、二つの分類変数間に仮説が棄却される、つまり、先輩との交流が増えるとかつ活動満足度も上がっているという結果が得られた。

表 5 先輩との交流度合いと活動満足度の関係

1年生向け		先輩との交流				
		全く満足していない	あまり満足していない	どちらともいえない	ある程度満足している	とても満足している
活動満足度	とても満足している				4	4
	ある程度満足している		4	4	14	6
	どちらともいえない	1	5	4	3	1
	あまり満足していない		4			
	全く満足していない		1	1		

次に表 6 を見てみると、先ほどと同様に対角線上に分布していることがわかる。カイ二乗検定を行っても、二つの分類変数間に関係がないという仮説は棄却されるので同級生との交流が増えるほど活動満足度が高いと言える。よって、一年生において交流度合いが活動満足度に大きく影響していることがわかった。

表 6 同級生との交流度合いと活動満足度の関係

1年生向け		同級生との交流				
		全く満足していない	あまり満足していない	どちらともいえない	ある程度満足している	とても満足している
活動満足度	とても満足している				4	4
	ある程度満足している	1	2	3	14	8
	どちらともいえない	1	6	4	2	1
	あまり満足していない	2	2			
	全く満足していない		2			

※カイ二乗検定を行うにあたり、標本数の関係から5つの選択肢を3つ

にして分析した。

4. 提案

4.1. 部活・サークルに対する提案

アンケートによって得られた結果から、私たち 6 班は、「部活・サークルは今までの活動内容にとらわれず、継続的に活動するのが良い」という提案を行う。この提案に至った背景を説明する。これまでの分析から、今年の一年生はサークルに対して何をするかではなく、人と交流を求めていると分かった。交流の場を創出するためには継続的な活動が最も効果的であると考えるが、これまでの通りの活動だと現段階ではできないことがないという団体も多くある。

そういった団体については、以下にあげた例のように、これまでとは違う、多様な活動を行うことが重要になるとだろう。

- 体育館等の活動でガイドラインを守ることのできない体育系の団体：トレーニングの一環として少人数でのストレッチ
- 室内でガイドラインを守るのが難しい文化系、芸術系の団体：外に活動拠点を移す・zoom等を活用してオンラインでの活動を増やす

活動内容を変更するなどして継続的に活動し、交流の場を創出することも重要だが、一年生と団体を結びつけることも重要なことの一つである。

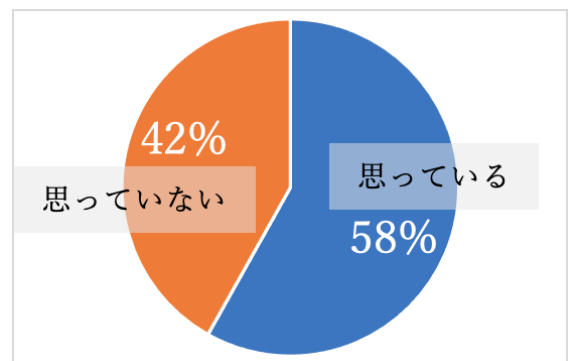


図 3 一年生における部活・サークル未加入者の加入意思

図 3 を見てわかるように、部活・サークル未加入の一年生において過半数が、部活・サークルに加入する意思を持っていることが分かる。

図 4 は、部活・サークルに未加入の一年生に加入していない理由を尋ね、得られた回答である。半分を超える一年生が、入る時期が分からなかったと回答している。これは新型コロナの影響を受けた今年ならではの傾向で

あり、何らかの対応が各団体には求められると言えるだろう。

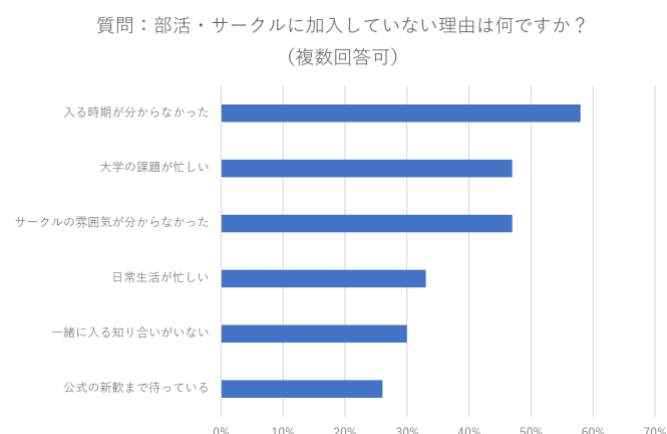


図 4 一年生における部活・サークル未加入者の未加入理由

今年は、例年のように全団体としてのまとまった新歓時期がなく、新歓の有無、時期は各団体によって様々だった。その一方、先ほども示したように新入生からは加入する時期が分からないといった声が多く寄せられている。よって、一年生が興味を持った時には、もう新歓等が終わってしまっているといった事例も考えられる。そういったミスマッチを防ぐために、どうするべきだろうか。解決策として一年を通した定期的な新歓・体験会を行うのが良いのではないかと考えた。新入生は新歓等に参加することで交流の機会を増やすことができる。また、部活・サークルの雰囲気を体験できる、加入する時期が増えることで、途中からでもより抵抗感を感じることなく加入できると推測される。部活・サークル側は、部員の確保がしやすくなると考えられる。また、定期的に行うことで我々の提案する継続的な活動につながるとともに、交流の場も創出できる。すなわち、双方にメリットが生まれる方法であり、有効な方法であると私たちは考える。

4.2. 学生に対する提案

部活・サークルの分析から対面とオンラインでの活動と交流度合いの関係はないことが分かった。また、1年生の分析から、交流が増えると活動満足度が上がる、対面での活動とオンラインでの活動に満足度の差は出なかったということが分かった。これらのことから、活動が対面でもオンラインでも交流度合いに及ぼす影響は小さい、つまり、交流を増やすためには活動形態に関わらず参加した方がよいと考えられる。また、新型コロナウ

イルスは全国的に見て感染拡大の傾向にあり、状況次第では再び対面活動に規制が敷かれる可能性がある。以上のことから、部活・サークルへの参加方法を複数考えておいた方がよいのではないかと考えた。

参加方法の具体例として次の2つが挙げられる。1つ目は活動形態に分けて様々な部活・サークルに所属することだ。活動形態に変化があっても他の団体に所属することで交流の場を維持することができるが、所属団体への思い入れが少なくなる可能性が考えられる。2つ目はオンラインのみ実施の部活・サークルを選ぶことだ。大学の活動自粛要請に左右されませんが、参加できるのはミーティング中心の部活・サークルに限られることが考えられる。

4.3. まとめ

Withコロナ時代において部活・サークルには活動を継続的にすることによって交流の場を創出することや部活・サークルの特性に縛られず多様な活動に努めること、学生に対しては交流を増やすためには活動形態に関わらず参加したほうがよく、部活・サークルへの参加方法を複数考えることが求められている。

5. 謝辞

今回演習を進めるにあたり、担当教員の谷口守先生、TAの清水宏樹さん、アンケートの回答にご協力いただいた1・2年生の皆様、部活・サークル代表者の皆様、アンケートの配布にご協力いただいた1・2年生の皆様予備調査にご協力いただいた1年生、部活・サークル代表者の皆様この場を借りて感謝を申し上げます。

6. 参考文献

- 1) 茨城大学 10/19から学内での課外活動を再開一研修会で感染症対策の課題をシェア
<https://www.ibaraki.ac.jp/news/2020/10/16010987.html>
- 2) 茨城大学 新型コロナウイルス感染症に係る本学の取り組み
<https://www.ibaraki.ac.jp/generalinfo/covid19/measures/index.html>
- 3) 千葉大学 ニュース・イベント情報
https://www.chiba-u.ac.jp/others/topics/2020covid-19/post_13.html
- 4) 東京大学 新型コロナウイルス感染症に関連する対応について
<https://www.u-tokyo.ac.jp/ja/general/COVID-19.html>
- 5) 筑波大学ホームページ
<http://www.tsukuba.ac.jp/about/antidisaster/covid-19-list.html>
- 6) Yahoo! JAPAN 新型コロナウイルス感染症まとめ
<https://hazard.yahoo.co.jp/article/20200207>
- 7) 浅井 晃・村上 正康 共訳：P.G. ホーエル著 初等統計学，培風館，2019